

■ 願掛けをもうひとつだけ ■

新年を迎え、3学期が始まると、センター試験までもう間近である。我が子が受験生の頃を思い起こせば、家の中にどことなく緊張感が漂っていた気がする。当の本人は比較的落ち着いている様子だったが、家族は本番に力が出せるようにと、当日の朝、メッセージカードを渡した。

まずは、3つの言葉。〈だいじょうぶ「わたし」がついている〉(工藤直子：詩人)。〈くじけそうなのは、あなたが進んでいる証。／しかられたのは、あなたが愛されている証。／つらいのは、あなたがあきらめていない証。〉(AC：公共広告)。〈案ずるより、横山やすし〉(デーブ・スペクター：芸人)。続いて、家族が一人一言を添えた。

効用があったかは判らない。でも、3人とも大学生になった。振り返ってみると、受験学年には、子どもの顔つきが徐々に引き締まり、大人びて来る。青春期の挫折が生涯の糧になることもある。だから、成長を眺めながら、最後まで投げ出さないことだけを願っていた。

ある県の公立中高一貫校の校長からこんな話を聞いた。中学にあたる学年を担当する教員は通常の中学校から人事異動で赴任してくるが、数年勤務すると戻りたがる。その大きな理由は中高一貫校には高校受験がないからだそうだ。受験が生徒を成長させるのを見てきた先生にとっては、そこに関われないもどかしさがあるのだという。

自分で自分の進路を決定するというのは独り立ちの儀式でもあろう。その儀式を通して、生徒たちが届けてくれるものがある。それは、原点を忘れない心だったり、努力を続ける力だったり、折れない気持ちだったり、失敗を受け止める強さだったり、悔しさから這い上がるたくましさだったり。

受験は厳しい。合格か不合格か、はっきりと結果が出る。だから、頑張る生徒を見ると、無性に応援したくなる。きっと、自分が思い描く自分になるために、挑み続ける彼らの姿に、胸の奥の何かが揺さぶられるのだろう。

管理職になってからは、直接生徒を指導することもなくなるため、せめてもの気休めにできることはもっぱら神頼みである。出張ついでに、昨年度は湯島天神に、今年度は太宰府天満宮に寄った。この正月もいつものように氏神様に初詣した。わずかな御神饌で家族の健康、学校の安全と発展、そして3年生の合格を祈願するのは欲張りだが、神様も許してくれるに違いない。



初詣の夜にジンジャーエールを飲んだ。私は神頼みをした日には願掛けに決まってこの炭酸飲料を飲むことにしている。なぜなら、生姜で香り付けしたこの清涼飲料水は、そのネーミングからして、神様からの応援がもらえる気がするからである。